

「延世大学校派遣参加報告書」

京都大学文学部2年 金山日向子

今回の派遣に参加する以前と今回の派遣に参加した後の、自分の大きな変化として、「留学」というものへのハードルの高さの変化があります。以前は、長期の留学というとやはり非常にハードルの高いものでした。そのため、経済的に余裕があり、将来外国で働くことを志しているような学生が行うものだイメージしていました。しかし、韓国語学堂の正規クラスに編入し、この考えが大きく変わりました。まず、クラスメイトの年齢が多様でした。もちろん大学生にあたる年齢の生徒が多かったですが、大学卒業後に語学堂で勉強をしている生徒もいました。国により環境は異なるし、その本人の覚悟は私にはわかりませんが、大学卒業後にも長期の留学ができるのだと、考えが変わりました。もうひとつ、クラスメイトの国籍も多様でした。クラスにはヨーロッパやアメリカ出身の生徒が複数いました。韓国語は現在朝鮮半島でしか公用語として使用されていないので、日本や中国の学生が韓国語を勉強すれば、将来役に立つ場面が多いと思われます。しかし、ヨーロッパやアメリカでは、そのような機会は少ないでしょう。学んだ言語を必ずしも仕事に生かさなければならないわけではなく、自分の興味に従ってもいいのだと、当たり前のことを強く再確認しました。このようにクラスメイトから多くのことを気づかされました。

今回の派遣で経験したことの中で、休日に一人のクラスメイトと出かけたことが強く記憶に残っています。そのクラスメイトは中国人で、私は全く中国語がわからず、彼女は全く日本語がわからないので、会話はすべて韓国語で行いました。筆記試験で私と彼女は同じクラスに振り分けられましたが、実際に韓国語を使うとなると、レベルの差は歴然でした。彼女は、筆記試験では測れないリスニング、スピーキングがとても上手でした。とっさに相手を気遣う言葉や、自分の今の感情を伝える言葉を自然に使っていました。日本で机に向かって勉強しているときには、見たことのない言葉でした。やはり言語である以上、その勉強は相手を想像したものでなければならぬと強く感じました。またそのように、友達ともっと自然に話したい、という思いが、上達を早めるのだと思います。